# 「和泉式部百首」考

## ――恋部を中心に――

小林　恵

### 一、好忠百首の恋歌

ゆらのとをわたるふな人かちをたえ行ゑもしらぬこひのみちかな（以下、私家集の本文と歌番号についてはことわらないかぎり「私家集大成」の本文に拠る）

この歌は、「新古今集」や「百人一首」にも採られた、曽祢好忠の代表的なものであるが、もともとは春夏秋冬恋沓冠歌物名歌からなる百首歌中にあって、恋部の冒頭を飾る歌である。

北村杏子氏は、契沖「百人一首改観抄」の

（略）此由良の門紀伊といふ。きの国に由良ある事勿論なれど、曽丹集を見るに、丹後掾にてうづもれ居たることを述懐してよめる歌おほければ、此由良は、丹後の由良にて、楽天が太行路に太行山の道の艱難なるをもて男女の中にもたとへ、又男女の中をもて君臣の間にたとへたるがごとく、此歌もおもては恋の歌にして、我一才ある事を吹挙してみかどに奏する人なくて、召上げられて然るべき官爵を授らるゝ事もなきを、たとへ出せるにや（略）

を挙げられ、同じく百首中の

とふとりのこころはそらにあくかれてゆくゑもしらぬものをこそおもへ

にも詠まれる「行方も知らぬ」という表現について、用例を調べられて

「ゆくへもしらぬ」の表現が「海」「空」等に関する語を伴なって万葉集時代から好忠などの時代にあって、無常感、無力感をただよわせているのではないか（略）このような観点からみるならば、「ゆらのとを」の一首が恋歌であるというより述懐の歌であり、「とぶとりの」の一首も又述懐の意がこめられているという説も不当ではないわけである。

と述懐性を指摘された。（注1）

好忠百首の述懐性については、藤岡忠美氏が指摘されて久しい。（注2）百首に付された序文は

いてつかふることもなきわか身ひとつにはうけれとも……

と沈淪訴嘆の色濃いものであるし、四季歌、沓冠歌、物名歌も同様である。しかし、百首歌が沈淪訴嘆の具として詠まれたならば、な

ぜ私的な物であるはずの恋を、恋部という部立を設けて連ねたのであろう。北村氏の御指摘はこの疑問に一つの答えを示された。確かに、北村氏の論じられた二首以外にも述懐性の濃い恋歌が認められるのである。

例えば、序文において百首歌製作の動機をつづる中に

みつくきのあとにしるして　かすならぬこころをひとつなくさめんと　もゝちのかすをよみつゝけ

と、不遇な自分を「数ならぬ」と表現しているが、恋部においても自分を「数ならぬ」と詠む恋歌がある。

きみこふるこゝろはちゝにくたくるをなとかすならぬわか身なるらん（四一六）

この歌は「千ゝ」と「数ならぬ」を対照させた技巧的な歌ではあるが、根本には序文にあったのと同様の不遇感が読み取れる。また、恋部ではないが、沓冠歌、物名歌中の恋歌にも用例を見出せる。

かすならぬこゝろをちゝにくたきつゝ人をしのはぬときしなければ（四二二）

かすならておもふおもひのとしふともかひあるへくもあらすなりゆく（四五四）

これらの歌の「数ならず」という表現は謙遜の意ではなく、自己卑下と訴嘆のために用いられているように思われる。

また、序文において、人生をはかないものであるとして、

ひをむしのひをくらし　くさはのたまのかせをまつほとなれはみつのあはよるもことに　はるのゆめにもけならす

と、「水の泡」に例えており、「泡」は

水早み船も通はぬ谷の底にとまらぬ泡の身をいかにせん（大系本　四七七）[注3]

の「泡の身」のように、述懐性の強いつらね歌において、むなしく生きている自分自身を例える場合にも用いられているので、沓冠歌中の

ひとこふるなみたのうみにしつみつゝ水のあはとそおもひきえぬる（四四一）

という恋歌にも述懐の意が込められていると思われる。

以上のように、百首中の恋歌には述懐的な用語が用いられており、好忠百首は恋歌を含めて「沈淪訴嘆」という一つの主題で括られているのではないだろうか。

## 二、和泉式部百首の恋部の位置付け

それでは、和泉式部百首はどのような主題をもつものであろう。今までのところ、式部百首は、四季部と恋部とが個々に論じられてきた。久保木寿子氏は恋部のみの主題を想定され、また、手法も四季部と異なると論じられた。[注4] 吉田幸一氏は四季部と恋部は成立時期が違うとまで推論されている。[注5]

確かに、季節の折々の景物を詠むことを主体とした四季歌に比べ題を設定して恋を詠む題詠歌は当時あまり試みられていない。したがって、式部百首の場合も、四季部と恋部を切り離して考えるのもやむをえないかもしれない。しかし述懐性の強い好忠百首の恋部冒頭にやはり述懐性の強い歌が置かれたことからすると、式部百首の恋部も百首の一部として、四季歌と同一線上に論じることができるのではないだろうか。

恋部が切り離されて論じられてきたことの要因の一つは、四季部

に先行定数歌の影響が多く認められたのに対し恋部がそうでなかったためと思われる。恋部に関しては次の二点が指摘されているだけである。(注6)

①きみこふるこころはちゝにくたくれとひとつもうせぬ物にそありける（九一）

の上句が、好忠百首中の

きみこふるこゝろはちゝにくたくるをなとかすならぬわか身なるらん（四一六）

の上句に倣ったものである点

②九〇番歌に詠まれる「あま」は、好忠や重之百首から摂取した歌材である点

ところが、検討してみると他にも影響の認められる歌がありそうである。例えば

をしとおもふ命にそへてをそろしくこひしき人のたまかはるもの（八八）

の「惜しと思ふ命」という表現は、勅撰、私家集にわずかに用例があるのみで(注7)式部集においてもこの一例しか見られず、好忠百首中の

惜しと思う命心にかなはなんありへば人に逢ふせありやと（大系本　四四二）

の表現を踏まえた可能性がある。

また、

くろかみのみたれもしらすうちふてはまつかきやりし人そ恋しき（八六）(注8)

に詠まれる「黒髪」という語は式部集中この一例のみであるが、三代集に十例見られる。ところが、「拾遺集」中の万葉歌

うば玉の妹が黒髪今宵もやわがなき床になびき出ぬらん（恋三　読み人しらず）

を除く全ては「白髪」と対比させた上での老境の歌である。一方、好忠百首恋部には「黒髪」という語は用いられてはいないものの、次のような歌がある。

わきもこかゆらのたますちうちなひきこひしきかたによれる恋かな（四一一）

「曽祢好忠集全釈」(注9)は「玉筋」を「玉を通してある糸」として上句を「妻の持っている飾りの玉が、ゆらめいて音を立ててなびくように」と解しているが「標注曽丹集」に

末の恋の歌十首のなかに、我妹子がゆらの玉すぢとあるを、夫木にはうばの玉すぢと有。（略）ぬば玉の黒髪といふを、うばの玉すぢといひて、やがて黒髪のこととせり。

とあり、(注10)また「曽丹集摘草」に

和泉式部集にも〈うば玉のすぢ〉とよめれば、〈うばの玉すぢ〉のかたよらんか。〈髪はゆら〳〵とか、り〉などいふ物語詞もあれば、本集も捨てがたし

ともあり、「ゆら」は本来はゆらめいて音をたてる擬音語ではあるが

髪は扇を広げたるやうにゆら〳〵として（源氏物語　若紫）

のように髪について言う用例もあるので、好忠の歌も黒髪を詠んだものと解したい。おそらく式部は前出の「拾遺集」の万葉歌と、好忠のこの歌を両方念頭において詠んだのであろう。そして男性の歌を女性の歌として詠み変えた時に、自己を別の視点から客観的に眺めて詠むといった「自己客体視」の方法が取られたのではなかろう

か。

この他直接的な影響ということではないが、恋部には万葉歌を踏襲した表現が多い。先行百首及び式部百首の四季部は万葉語を多用しており、[注11] それにより非日常的な、物語的雰囲気をただよわせているのであるが、恋部もまたそのような特徴が認められるのである。例えば、

あふことをいきのをにする身にしあれはたゆるもいか、かなしと思はぬ（八九）

に詠まれる「いきのを」は、「万葉集」に十六例用いられているものの八代集には用例がない語である。また

よそにてはこひしまされはみさこゐるいそによる舟さしてたにせす（八四）

に詠まれる「みさご」も「万葉集」に六例用いられているが八代集に用例がない語である。のみならずこの歌は「万葉集」の

みさごゐるすにゐる舟のこぎ出なばうらこひしけむのちはあひぬとも（巻十二）

を踏まえて詠まれているものと思われる。このように万葉歌を念頭に置いたかと思われる歌は他にも見出せる。[注12]

見えもせむ見もせん人をあきことにをきてはむかふか、みとも哉（八二）

まそ鏡手に取り持ちて朝な朝な見るときさへや恋のしげけむ（巻十一）

夢にだにみえもやするとしきたへの枕うこきていたにねられす（八七）

しきたへの枕動きて夜も寝ず思ふ人には後もあふものを（巻十一）

やまかけにみかくれおふる山くさのやますよ人を思ふこ、ろは（九五）

山川の水陰に生ふる山すげのやまずも妹がおもほゆるかも（巻十二）

以上述べてきたように、恋部の歌は、四季歌同様に、先行百首の特徴を受け継ぐものであり、四季部と恋部はそれぞれ独立させて論ずるのでなく、百首歌を構成するものとして、主題なり、特質なりを同一線上に論じていくべきと思われる。

## 三、恋部の特色

そこで、まず、恋部にどのような歌が連ねられているかをみていくことにする。

通常、勅撰集などの恋部の歌は、恋愛の発展段階にしたがって、片思いから始まる恋愛初期、成就した中期、その後の破局まで、といった順に配列されている。ところが好忠を始めとする百首歌の恋部の場合、必ずしもそのような配列にはなっていない。好忠百首恋部について「曽祢好忠集全釈」は

以上の恋十首を見ると、会わざる前の恋慕の情、会って後の恋煩い、失恋の悲しみと、恋の進行の順序に並べてある。

と指摘しているが、冒頭歌は前述のように「行ゑもしらぬこひのみちかな」という観念的な歌であるし、「きみこふとしのひ〳〵に身をやきて（四一七）」「こ、ろのうちにものは思（四一八）」と「忍ぶ恋」の歌が後から三首目、二首目といった位置に置かれている。源順、恵慶、源重之、重之女百首においても、やはり発展順に並ん

でいず、全般的に「忍ぶ恋」の歌が多いように思われる。

恵慶の恋部は「田子の浦（二三九）」「磐代（二四〇）」「大島（二四三）」「みくまの（二四四）」「みもすそ川（二四五）」と地名を並べ、重之の恋部も同様に「伏見の里（三〇一）」「難波（三〇二）」「松島（三〇五）」「淀（三〇六）」「その原（三〇七）」「筑波山（三〇八）」「名取川（三〇九）」「まがきの島（三一〇）」といった地名を並べている。

また、これら百首歌の恋部には「我妹子」「妹」「つま」といった語が多用されている、「あま」「舟」など共通の歌材が見られるという特徴があり、それぞれが先行百首歌の恋部に影響を受けつつ何らかの配列意識のもとに構成されたと想像される。

私的なものであるはずの恋情を、公けにすることを意識して歌にすることは、歌人にとって精神的重圧を感ずるものであったに違いない。したがって百首歌の恋部が、その支えとして独自の配列意識の上に成立していることは想像にかたくない。しかしながら、諸氏により指摘されているように、当時はまだ恋題が未発達であったのである。さらに百首歌はそれ自体新しい試みとして、また、歌人の力量を示すものとして注目された形式であったろうから、恋部の構成にはそれぞれが工夫をこらす必要があっただろう。

それでは、式部百首の恋部は、どのような構成意識に依拠しているのであろうか。

そこで恋部の歌の内容を分析し、下表にまとめてみた。

まず注目せられるのは、他の百首歌同様「不逢恋」、すなわち恋愛の前段階における歌が多く配されているという点である。しかも「（思う人が来るかと空を）見らるる（八一）」「見えもせむ見もせん（八二）」「見るよしも哉（八三）」「見ば（八五）」「見えもやする（八七）」「見るめのおいませば（九〇）」と「見る」という語を軸に、恋人に逢うことを希求する歌、いわゆる「見ぬ恋」の歌が連ねられている。

例えば、

つれ〳〵とそらそみらるゝ思ふ人あまくたりこん物ならなくに（八一）

は

夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて（古今集・恋一）

大空は恋しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらん（同・恋四）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 八〇 | 観念詠 | 八六 | 逢後恋 | 九二 | 不逢恋 |
| 八一 | 不逢恋 | 八七 | 不逢恋 | 九三 | 観念詠 |
| 八二 | 不逢恋 | 八八 | 逢後恋 | 九四 | 不逢恋 |
| 八三 | 不逢恋 | 八九 | 逢後恋 | 九五 | 観念詠 |
| 八四 | | 九〇 | 不逢恋 | 九六 | |
| 八五 | 不逢恋 | 九一 | 観念詠 | 九七 | 観念詠 |

八四　よそにてはこひしまされはみさこゐるいそによる舟さしてたにせす　九六　かれをきけ小夜更行はわれならてつまよふちとりさそなくなれ　の二首は意味が定まらず決定できない。また、観念詠と不逢恋などでは分類のスケールが異なるが、便宜上、恋愛の最中の心情というよりは恋そのものを観念化して詠んでいる歌を観念詠とした。

天雲を千重にかきわけ天下る人もなにせん妹にしあらずは（古今六帖）

を念頭に詠まれたと思われる歌であるが、「天下る」といった場合、次のように、神を主体とする神話的文脈の用例がほとんどである。

あしはらのみづほのくにをあまくだりしらしめしけるすめらきのかみのみことのみよかさね（万葉集・四〇九七）

天下る荒人神のあひおひをおもへばひさし住吉の松（拾遺集・神楽歌）

式部の歌では、恋人は「天下る神」のような存在として神聖視されているのである。逢って後に再び逢うことを期待する歌ではなく、少女が、理想的な恋人の出現を夢見ているような情景を想像させ、まだ見ぬ、しかしやがては現れるであろう恋人に恋する、すなわち恋に恋するといった雰囲気を感じさせる。他の「見ぬ恋」の歌も同様で、相手意識の希薄な、恋そのものに憧憬するような歌が連なっている。

さて、前表をふりかえると、観念的な歌が恋部の冒頭と末尾に置かれ、また部立内にも散在している点も指摘できる。

久保木氏は、この点に注目されて、次の二点から、恋部が「人を思ふ」という主題の上に成り立っていると論じられた。(注13)

①いたつらに身をそ捨つる人をおもふ心やふかき谷と成らん（八〇・冒頭歌）

やまかけにみかくれをふる山くさのやますよ人を思ふこゝろは（九五）

の二首に「人を思ふ」とあるのは主題の提示、反復である。

②十八首中十首に観念的な「人」という語が詠まれている。

主題を「人を思ふ」とすることにはにわかに同意しがたいものの「人を思ふ心」つまり「恋」そのものを客観的に詠んでいることは疑いないであろう。例えば

をしとおもふ命にそへてをそろしくこひしき人のたまかはる物（八八）

君とふる心はちゝにくたくれとひとつもうせぬ物にそ有ける（九一）

なみたかはおなしみよりはなかるれとこひをはけたぬ物にそ有ける（九三）

世中にこひといふ色はなけれともふかく身にしむ物にそ有ける（九七）

の四首は「物」という抽象的な語を用いて詠んでいる。特に九一・九三・九七番歌では結句に「物にぞ有りける」という表現を繰り返している点が注目せられる。九一番では「君恋ふる心」は「一つも失せぬ物」であると歌い、九三番では「涙川」は「恋という火を消さない物」であると気付き、九七番では「恋という緋色」は「深く身に染む物」であると詠嘆しているのである。それぞれが恋をする時の心的状況を客観的に、かつ冷静に分析している。

また、恋をする自分を「身」と「心」とに詠み分ける対自的な手法も、前出の九三・九七番や次の歌などに見られる。

いたつらに身をそ捨つる人をおもふ心やふかき谷と成らん（八〇）

あふことをいきのをにする身にしあれはたゆるもいかゝかなしと思はぬ（八九）

八〇番は「人を思ふ心」が「谷」となりそこに「身」を捨てたと、

我が身を振り返る歌であり、八九番も「逢ふこと」を「生きの緒」すなわち「命」とする「身」であると歌い、いずれも「恋心」によって操られている「身」を客観的に認識しての詠である。

さらにまた、恋部からは

くろかみのみたれもしらすうちふてはまつかきやりし人そ恋しき（八六）

および前出九一・九三・九七番歌が「後拾遺集」に入集しているのであるが「くろかみの」の歌が恋三に採られたのを除くと、残り三首は恋四に採られている。このことは実はこれら三首が観念詠であることを裏付けているのである。恋四の部立の特徴については、既に武田早苗氏の御論がある。(注14) 武田氏は

○詞書が短く題しらず歌が多い、すなわち独詠歌的性格を有している歌が多い

○具体的な事柄を抽象化する「もの」という語の使用率が他の巻に比べて高い

といった点について指摘されて、恋四の歌が観念的であるとされ

恋愛を恋愛として一歩離れ、詠者としての自分が、自分を見る、換言すれば、もう一つの自己を内部に存在させるという新しい作者の視座の確立が、和泉式部や相模に代表されるような女流作家による新傾向の恋歌を増大させ、そのことが、後拾遺集内に「恋四」という特色のある部立を生み出す原動力となったと言えるのではなかろうか。

と述べられた。「詠者としての自分が、自分を見る」方法というのは、諸氏により論じられているところであるが、和泉式部の歌の大きな特徴でもある。「後拾遺集」恋四に採られたこの三首はまさに最も式部らしい歌と言って過言ではないだろう。そして式部百首の恋部から三首もこの部立に採られていることは、逆にいえば式部百首恋部の特徴の傍証ともなりうるのではなかろうか。

以上から、式部百首恋部の一つの性格として「観念的・対自的」という点が挙げられることは疑いなく、さらに「恋に恋する」歌が多いことを考え合わせてあえて主題を探れば「恋」そのものであると言わざるを得ない。

式部は恋歌を連作するに当たって、私的、具体的な恋の場面の歌を連ねるのでなく、至極真面目に「恋」そのものについて考え、恋心とはどういったものなのか、我が身と心と、命と恋と、どう考えているのかを詠んでいったのではなかろうか。

## 四、恋部の置かれた意味

式部百首の四季部に、人に見捨てられた嘆きの色濃い歌が散在していることについては、以前拙論において指摘した。(注15)

春はたゝ我宿にのみ梅さかはかれにし人もみにときなまし（春・四）

のように深刻な嘆きの歌は、実に四季部の五〇パーセントを占めており、折々の景物に寄せた恋の嘆きが詠み重ねられて、物語的世界を構築していた。

では、なぜ恋部の歌にそういった恨みや苦悶やあきらめが読み取れないのだろうか。

理由として考えられるのは、恋部が、恋を主題とした百首歌の総括的な意味を持っていたのではないかということである。式部は、四季部に恋の嘆きを詠んだ。好忠ら男性歌人が百首歌に卑官を嘆い

たように。そして、一年を通じて常に頭を離れず悩まされつづけた「恋」そのものを恋部において顧みて、「恋」とは、振り返れば「命」そのものであり（八八・八九・九二番歌）、千々に砕けても「一つも失せぬ物」（九一番歌）、消えない物（九三番歌）、やまない物（九五番歌）、「深く身に染む物」（九七番歌）であったと締め括っているのではなかろうか。

四季部においてたたみかけるように連ねられた恋の嘆きは、虚構であったのであろうが、一人の孤独な主人公を想定させ、あたかもその不幸な境遇を告白されたかのように思わせる真実味があった。恋部の十八首は、それら場面性のある歌を抽象化、普遍化して、恋を主題とする恋百首として完結させるために総括的な意味で置かれたのではないだろうか。

さて、そこで一つ疑問が残る。それは観念詠に混じって「見ぬ恋」の歌が多く詠まれていることである。四季部の、嘆きを中心とした恋歌と並べると違和感を感じざるを得ない。私は、作者式部の本音の表出と考えたい。四季部において虚構の世界を構築した式部は、対自的に恋歌を詠むに当たって、恋に恋する自分自身を思わずさらけ出してしまったのではなかろうか。理の中でなく、自分自身に向かい合った時、自然と「見ぬ恋」の歌が詠み出されたのではないだろうか。式部の百首歌は若い頃の試みとされている。（注16）恋部の「見ぬ恋」の歌に感じられる若さ、初々しさこそが、式部の本音であったようにも思われるのである。前述のように、本来ならば秘め事であるべき、そして具体的な場面で詠まれるべき恋歌を、公にすることを意図して連ねなければならないという精神的重圧が、式部が女性歌人であればこそなおさらに、このような破綻を生じさせたのではないだろうか。

## 五、おわりに

本稿では、今まで個々に論じられてきた式部百首の四季部と恋部に接点を見出すべく、主題の検討を中心に論じてきた。最終的には式部百首を含めた初期百首全部に関わる問題であり、さらにまた、「古今集」を始めとする勅撰集の部立意識を顧みる必要もあろう。しかし、式部百首が秀歌撰でなく百首歌として詠み出されたものである以上、百首を括る何らかの統一的視座が存在していることは想像にかたくない。そして、式部百首が、「恋」を主題とした百首歌であるならば、後世詠まれるようになる「恋百首」の嚆矢として高く評価されるべきであろうし、また、集の一六四～一七三番歌（一四六一～一四七〇に重出）の「つれづれのながめ」「あれたるやど」「ねざめのとこ」「あかつきの月」「うづみび」「あしたのしも」「そでのこおり」「庭の雪」「夕ぐれのおもひ」「うたたねの夢」という題をもつ連作や、「帥宮挽歌群」中の五十首歌の方法とも関わっていくように思われる。今後の課題としていきたい。

注（1）「ゆくへもしらぬ小考」――「好忠百首」中の二首をめぐって――」国文第64号　昭61・1

（2）「沈淪の歌――曽禰好忠を中心とする『生活派歌人』の動向について――」日本文学　昭36・11

（3）本稿では基本的には「私家集大成」に拠ったが、異本を底本とする「日本古典文学大系」により補った。ただし二本については祖本が同一であるとされている。この歌は「大系本」中のつらね歌の一首。つらね歌も「しらなみのたつきありせはすへらきのおほみや人となりも

しなまし」など述懐性の強い歌が並べられている。

(4) 「和泉式部百首恋歌群の考察」国文学研究69号　昭54・10

(5) 「和泉式部の娘時代とその詠草（上）（下）」平安文学研究70・71輯　昭58・12　昭59・6

(6) 平田喜信氏「和泉式部百首の成立」大妻国文1号　昭45・3参照

(7) 勅撰集では「新勅撰集」（八〇〇番）に一例あるが後世の例であり、私家集では「元輔集」（一七八）にあるが恋の歌ではない。

(8) 底本に「うちふては」とあるが「うちふせは」か。

(9) 神作光一氏　島田良二氏『曽祢好忠集全釈』笠間書院　昭50

(10) 注(9)からの引用。

(11) 注(6)論文に詳しい。

(12) 底本に「あきことに」とあるが「あさことに」か。

(13) 注(4)に同じ。

(14) 「後拾遺和歌集の四季部恋部の構成について」横浜国大国語研究2号　昭59・3

(15) 「中古女百首の性格」国文学論考22号　昭61・3

(16) 注(5)に同じ

（小山工業高専講師）

---

## 『日本語と日本文学』バックナンバー（2）

（20頁からつづく）

### 第二号（昭和57年11月発行）

伊藤　博　一つの読み
——遣新羅使人たちの悲別贈答歌について——

仁平　恭治　源経信と遁世者
——『撰集抄』における経信像——

吉見　孝夫　「小チャイ」考

小川　栄一　「水が飲みたい」・「水を飲みたい」式表現の用法差
——室町期の状態——

サトー・アメリア川崎晶子　ソーニア・ロンギ　語頭の位置にある否定的な意味をもつ造語要素
「無・不・未・非」の意味と使われ方

加納千恵子　日本語・マレイシア語におけるヴォイスの比較対照研究——日本語教育の立場から——

（48頁へつづく）